

富山市小西北遺跡発掘調査概要

2000

富山市教育委員会

富山市小西北遺跡発掘調査概要

2000

富山市教育委員会



調査区と周辺の地形(南より)



調査区全景(南より)



居館跡(北西より)



中世土坑 SK10 中世土師器出土状況(西より)



中世土坑 SK05 木製品出土状況(東より)



中世土坑 SK05 漆皿出土状況(東より)



中世土坑 SK05 櫛出土状況(東より)



中世土坑 SK21 下駄出土状況(南東より)

例　　言

1. 本書は、富山市小西地内に所在する小西北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、「特別養護老人ホーム」(第1次調査)・「老人福祉施設」(第2次調査)の建設に伴う発掘調査であり、社会福祉法人アルペン会の依頼をうけて、富山市教育委員会が実施した。
3. 現地発掘調査は、2回実施しており、おのおのの調査期間、調査面積は以下のとおりである。
第1次調査（平成6年実施）平成6年4月1日～平成6年6月28日 2,890m²
第2次調査（平成10年実施）平成10年4月2日～平成10年6月15日 1,411m²
4. 調査担当者は、第1次調査は、富山市教育委員会生涯学習課学芸員 古川知明、同堀沢祐一、第2次調査は、同主任学芸員占川知明である。
5. 出土品整理調査は、平成10年4月1日～平成12年3月31日にかけて行なった。
6. 本書の執筆・編集は、古川知明、堀沢祐一が行った。
7. 調査にあたり、次の方々や関係者からご協力いただいた。記して謝意を表します。
宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）・北陸中世土器研究会・小西町内会
8. 遺構番号は、SB：掘立柱建物、SD：溝跡、SE：井戸跡、SK：上坑、SF：道路跡、P：ピット、SX：不明遺構とし、記号の後に通し番号を付けた。
9. 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の位置と環境	1～3
II	調査に至る経緯	4
III	調査の概要	
1.	第1次調査	5～10
2.	第2次調査	11～13
IV	まとめ	14～16
	図版	17～34
	写真図版	35～78
	報告書抄録	79

I 遺跡の位置と環境

小西北遺跡は富山市の北部、小西北内に所在する。富山市街地から北東方向に 5.5km のところで、国道 8 号線の北側に隣接した地点である。遺跡の西側 4 km に神通川、東側 2 km に常順寺川が流れる。遺跡は常順寺川よって形成された扇状地の扇端部に立地しており、標高は 9 m を測る。

周辺には縄文時代から中世にかけて、数多くの遺跡が所在している。本遺跡周辺では、幾重もの自然流路が発達しており、帯状の微高地が形成され、その部分に遺跡が形成される傾向がある(第2図)。

縄文時代では、西方 2 km に豊田遺跡(縄文晚期)、北方 4.5km に岩瀬天神遺跡(縄文晚期)、南方 3.5km に浜黒崎野田・平根遺跡(縄文後期・晚期)、北東 2.1km に高島島浦遺跡(縄文晚期)があり、



1. 小西北遺跡 2. 岩瀬天神遺跡 3. 大村遺跡 4. そうけ塚 5. 日方江Ⅱ道跡 6. 浜黒崎町煩瀬跡 7. 浜黒崎飯田道跡 8. 高果道跡 9. 水橋荒町道跡 10. 野田Ⅱ道跡 11. 横越遺跡 12. 森遺跡 13. 浜黒崎悪地遺跡 14. 浜黒崎野田・平根道跡 15. 野中新長幡道跡 16. 平根鬼田道跡 17. 蓬町道跡 18. 米田大覚道跡 19. 高島島浦道跡 20. 高島道跡 21. 宮余南道跡 22. 水落遺跡 23. 针原中町Ⅰ道跡 24. 木落西道跡 25. 水落南道跡 26. 飯野新屋道跡 27. 宮町道跡 28. 针原中町Ⅱ道跡 29. 大島道跡 30. ちょうちょう塚北・ちょうちょう塚南 31. 豊田大塚道跡 32. 新屋敷田道跡 33. 宮成道跡 34. 豊丘町・豊田道跡 35. 伊那道跡 36. 畠中吉原遺跡 37. 三上道跡 38. 三上Ⅱ道跡 39. 金泉寺道跡 40. 下富居道跡 41. 飯野小百戸道跡 42. 中富居道跡 43. 上飯野道跡 44. 上富居道跡 45. 新庄村古城 46. 上飯野追込道跡 47. 新庄城跡 48. 千原崎道跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1:50,000)

縄文時代後期・晩期から集落が営まれはじめている。

弥生時代には、縄文後期・晩期の遺跡の上に営まれる例が多く、それらを素地とし、中期・後期の遺跡が主体となる。前述した3遺跡の他に、北西4kmに千原崎遺跡（弥生後期）・東方400mには三上遺跡がある。

弥生・古墳時代では、北方500mに宮町遺跡（弥生後期～古墳前期）、北西700mに飯野新屋遺跡（古墳前期）、西方2kmに豊田大塚遺跡（弥生後期～古墳前期）、ちょうどよう塚古墳がある。

宮町遺跡では、井戸跡や溝跡などが多数検出されている。遺物では、ヒスイ・碧玉・鉄石英などの石材や勾玉・管玉があり、工作りを行なっていたことが確認されている。飯野新屋遺跡では、井戸跡や建物跡・溝跡が検出されている。井戸祭祀を行なった痕跡が確認されている。さらに、豊田大塚遺跡では、湿地帯への土器の一括廃棄、木道、井戸跡、水さらし場などが確認され、湿地帯への土器の一括廃棄は水辺の祭祀行為の可能性が高い。

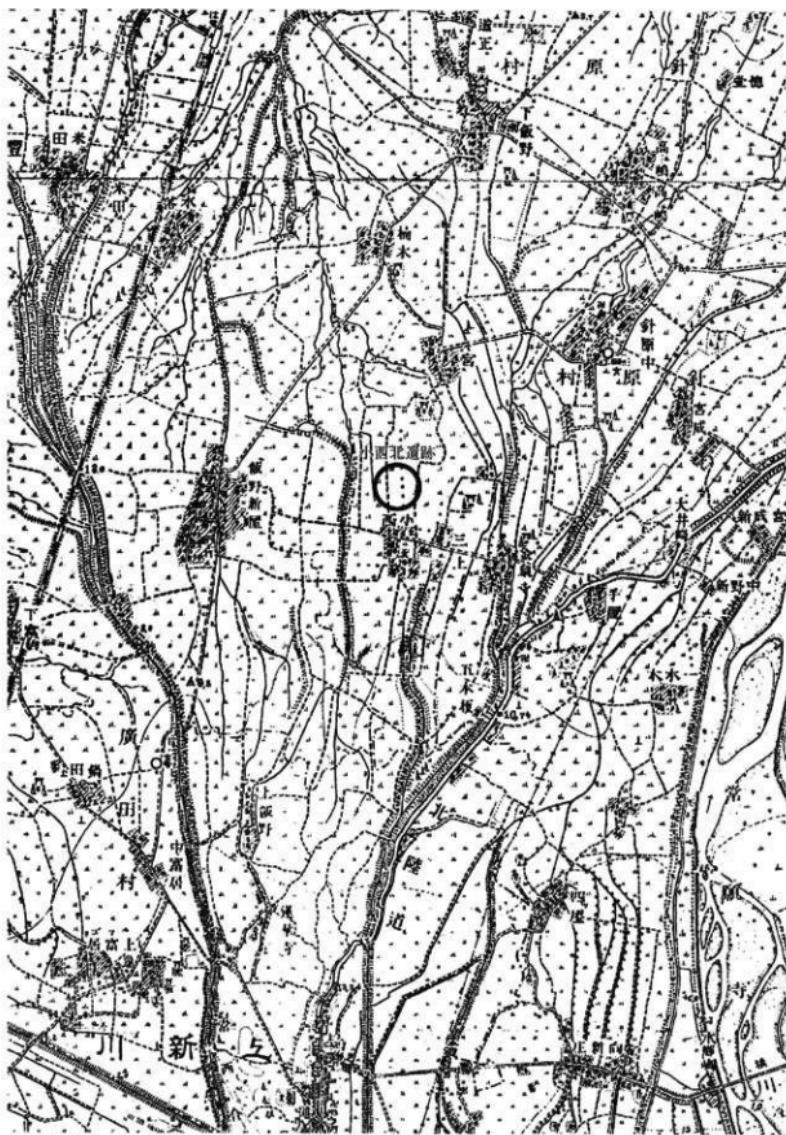
ちょうどよう塚古墳は、一辺約20m、高さ3.5mの方墳で、幅6～8mの周溝が巡るものである。遺物は、弥生終末期の壺・高杯が出土している。

奈良～平安時代では、前述した豊田大塚遺跡で、平安時代の溝跡から人面墨書き器や人形・畜牛が見つかっており、祈令祭祀が行なわれていたことが明らかとなった。また、北西2kmの米田大覚遺跡では、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などが検出されている。掘立柱建物が規則的に配列されており、石帶の帶飾りや墨書き器が（約100点）出土しており、官衙的な遺跡とされる。北東4.5kmには、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡があり、古代北陸道の駅家跡のひとつ「水橋駅」と推定される。また、北西4.5kmには、岩瀬地区があり、水橋駅のひとつ前の駅とされる「岩瀬駅」の比定地とされる。（岩瀬駅と推定できる遺跡は確認されていない）

本遺跡の中心年代となる、鎌倉～安土桃山時代では、周辺に数多く集落・城館が点在している。宮町遺跡では、幅mの広い堀によって方形に区画され、それをさらに幅mの狭い堀によって魚鱈型に小区画されている。区画の中には掘立柱建物跡や井戸跡（103基）が検出されている。掘立柱建物が小規模であることや刃口・鉄滓・砥石などの鍛冶道具・漆布の付着した珠洲焼があり、鍛冶職人・漆職人などが存在する町屋的性格が強いと推定されている。また、両側に側溝をもつ道路跡も検出されている。本遺跡とは隣接しており、両遺跡の関係は注目される。また、北西1.5kmには、宍条南遺跡・高島島浦遺跡・針原仲町I遺跡・針原仲町II遺跡があり、それらでは中世の掘立柱建物・井戸などが確認されており、中世集落が密集している地域である。

また、北方3.5kmには大村城・日方江城が、南方2.5kmには新庄城がある。これらは戦国時代の城館である。16世紀後半、上杉謙信の越中攻略の際に、越中側（神保氏）の防衛の拠点となつたものである。日方江城は、大村城の出城であったと伝えられている。新庄城は、16世紀前半に記録に表れるのが最初である。新庄城は上杉謙信の越中攻略の際に、攻め落とされ、上杉方の越中の攻撃拠点となつたものである。また、前述した針原仲町II遺跡は神保氏の館跡とする説もある。これらの他に、平坂城・豊田城などが挙げられる。

このように、本遺跡周辺は、縄文後・晩期に端を発し、それを受け継ぐように弥生・古墳の集落や古墳が山現する。さらに、奈良・平安時代には官衙の遺跡・祭祀遺跡が営まれるなど重要な地域であった。鎌倉～安土桃山時代には集落や城館が多く点在し、中世の軍事的位置においても重要な地域でもある。



第2図 小西北遺跡と周辺の地形

II 調査に至る経緯

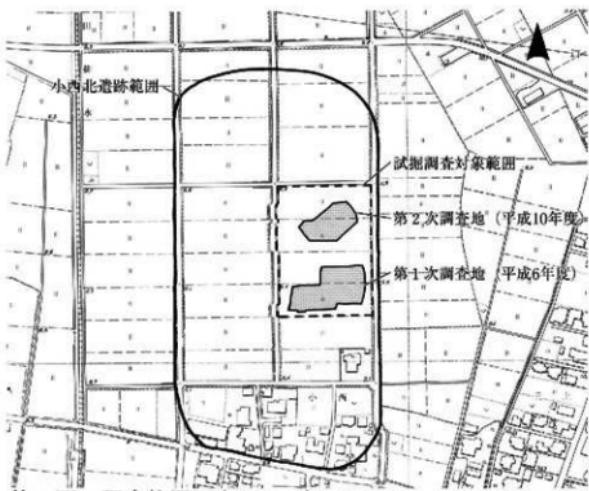
小西北遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年に富山市教育委員会が実施した富山市内の分布調査で発見された遺跡である。その際には、土師器や須恵器・珠洲焼が採集されている。No.212 小西北遺跡として富山市遺跡地図に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。この時点での埋蔵文化財包蔵地の範囲は 34,000 m² である。

平成 5 年 5 月、小西北地内において、社会福祉法人アルペン会（開設準備室）により特別養護老人ホーム建設計画が明らかにされ、同月、市教委に建設予定地（12,146 m²）の埋蔵文化財所在について照会がなされた。建設予定地は全域が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、試掘確認調査が必要となつた。試掘確認調査は同年 11 ～ 12 月に実施し、全域に遺跡の所在が確認され、古墳時代前期・平安時代・室町時代の溝や穴、土器や木製品などが出土した。

これらの結果に基づき建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行なつた。協議の結果、建物部分 2,890 m² を発掘調査、8,073 m² は工区除外、残り 1,183 m² は緑地及び駐車場として盛土保存することとした。平成 6 年 4 月、この協議内容について協定を締結し、同月に発掘調査に着手した。調査は同年 4 月 2 日から 6 月 28 日に行なつた。（第 3 図の平成 6 年度調査地に該当する。）

また、平成 8 年 12 月、社会福祉法人アルペン会は、平成 6 年度調査区に隣接した北側に新たに老人福祉施設建設を計画した。建設予定地（4,520 m²）は平成 5 年の試掘確認調査で埋蔵文化財の所在が確認され、工区除外の取扱いとしたところである。協議の結果、建物部分 1,411 m² を発掘調査、残り 3,109 m² を駐車場・緑地として盛土保存することとした。調査は平成 10 年 4 月 2 日から着手し、同年 6 月 15 日に終了した。（第 3 図の平成 10 年度調査地に該当する。）

出土品整理は、平成 6 ・ 10 年度 2 カ年の発掘調査をあわせて、平成 10 ・ 11 年度に実施したものである。



なお、小西北遺跡の範囲については、平成 6 ・ 10 年度の発掘調査成果に基づく検討により、当初の範囲から南北へ広がり、78,000 m² とした。この範囲は、平成 11 年 3 月をもって『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図 (改訂版)』に登載されている。

III 調査の概要

1. 第1次調査（平成6年調査）

(1) 調査の方法

調査は平成6年4月1日より開始した。重機（バックホウ）により、第1層を除去した後、人力によって遺物包含層（第2層）を掘り下げ、遺構を検出した。各遺構は土層実測、遺物実測、写真撮影などの発掘調査を実施した。調査区全域の発掘調査終了後に、空中写真撮影を実施して調査は同年6月28日に終了した。

(2) 基本層序

基本層序は、第1層が盛土・水田耕作土で50cm、第2層は黒色土（遺物包含層）は10~15cm、第3層は灰オリーブ粘土（遺構確認面）で13cm、第4層は黒色土で15cm、第5層は灰色粘土で13cm、第6層は黒色粘土で2cm、第7層は黄灰色粘土で5cm、第8層は黒色粘土で5cm、第9層は灰色砂で20cm、第10層は暗灰色砂で20cmである。第3層から第10層は、地山形成層である。深度の浅い遺構は、第4層まで、掘りこまれており、堀や井戸などの深度の深い遺構は第10層まで掘り込まれている。

(3) 遺構

i) 居館内

堀 跡

SD01（第6図・写真図版6~9）調査区の南西部分で検出した。溝は方形に巡る区画溝と推定され、堀の北東部を確認した。堀の南肩はSD05（古代溝）を切ってつくられている。確認した堀の規模は、北辺41m、東辺11m、幅4~6mである。堀の底面は平坦ではなく、凹凸が見られるため、遺構確認面からの堀の深度は最も浅いところで40cm、最も深いところで1mを測る。堀の底部には、盛り上がり部分が2箇所、張り出しが3箇所ある。盛り上がり部分2箇所は、北辺部の西側と中央部にあり、盛り上がりの上面はほぼ水平である。西側のものは長さ9mで遺構確認面から約60cm掘りこまれる。中央のものは長さ6mで遺構確認面から約40cm掘りこまれている。西側盛り上がりと中央盛り上がりの間は遺構確認面から約80cm掘りこまれており、底面はほぼ水平である。中央盛り上がりの東側も同様に掘りこまれており、遺構確認面から約1mを測る。

張り出しは西側盛り上がり部分で、堀の南肩から、張り出状の遺構が2箇所見られる。東の張り出しあは長さ70cm、幅50cmを測る。西側の張り出しあは長さ1.2m、幅50cmを測る。両者間は4.5mを測る。張り出しあは、堀の東辺部にも見られる。北東コーナーから南に約3mの地点である。ここでは、堀の両肩から張り出しが確認された。張り出しの平面形はともに三角形で、肩から一段落ちたあと、堀の中央部にむかって、緩やかに傾斜している。

覆土は、基本的に3層である。1層が青灰色砂（ラミナ状に暗青灰色粘質土を含む）、2層は暗灰色シルト質粘土、3層は黒灰色粘土である。3層が最も厚く堆積しており、ある時期に短期的に堆積したものと考えられる。

堀からは、須恵器・土師器・珠洲焼（甕・すり鉢）・中世土師器・越前焼・青磁・金属製品（小柄など）・木製品（曲物の底板など）・漆椀・打製石斧などが出土している。遺物は堀肩や堀の西側部分で集中して出土しており、小柄は北東コーナー付近の堀南肩部分から出土している。

溝 跡

S D 2 1 (第 17 図・写真図版 5) 検査区の南西部分で検出した。南北溝で、溝は検査区外南方向に延びる。長さ 6.1m、幅 1.4~1.9m、深さ 30cm である。北部分は、堀の 2m 手前で終結している。覆土は暗褐色土が主体的に堆積している。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・珠洲焼・中世土師器などが出土している。

井戸跡

S E 0 1 (第 7 図・写真図版 12) 素掘り井戸で、S D 2 1 の東側約 3m 地点で検出した。平面形態はほぼ円形で直径約 60cm である。断面形態は円筒形で、深さは 75cm である。湧水は底面付近であるが、それほど激しくはない。覆土は上から暗褐色土、黒褐色土の順で堆積している。遺物は、暗褐色土から古瀬戸のすり鉢・底面付近（黒褐色土）から漆皿が出土している。

S E 0 2 (第 7 図・写真図版 10~11) S E 0 1 同様、素掘り井戸である。S E 0 1 の東側約 10m の地点で検出した。平面形態は円形で直径約 60cm である。断面形態は円筒形で、深さは 78cm である。遺物は、木製品や珠洲焼・中世土師器が出土した。井戸を確認面から 20cm 掘り下げた段階で、井戸内には木製品（棒状木製品・板状木製品など）が密集している。また、井戸のほぼ中間地点（確認面から 30cm）から小型の曲物が出土している。さらにその下には木製の籠物（籠）の一部が出土している。

土坑

S K 0 1 (第 8 図・写真図版 13) S D 2 1 の西側で検出した。平面形態は隅丸方形で、長軸 4.0m、短軸 3.1m である。断面形態はコの字状で、深さは 70~90cm である。覆土は、暗褐色土・暗灰褐色土・暗黄褐色土、黒褐色粘質土の順で堆積する。暗褐色土中には弥生土器・須恵器・土師器・珠洲焼・中世土師器・青磁・ヒスイ原石などが散発して見られる。また、暗黄褐色土中には、厚さの薄い板状の木製品が出土している。

S K 0 2 (第 7 図・写真図版 17) S D 2 1 の東側で検出した。平面形態はほぼ円形で直径約 60cm である。深さは 30cm である。暗褐色土を主体としており、弥生土器・土師器・珠洲焼・中世土師器が出土している。

S K 0 5 (第 9 図・写真図版 14) S D 2 1 の東側 3m で検出した。平面形態は楕円形で長軸 1.2m、短軸 90cm である。断面形態はコの字形で、深さは 80cm である。覆土は、基本的に黒褐色土の単層である。遺構検出面から 50cm 掘り下げた段階で、箸状木製品や漆皿・櫛などが一括廃棄された状態で出土した。廃棄された層の厚さは 40cm になる。箸状木製品は 200 点にも及ぶ。

S K 1 7 (第 9 図・写真図版 16~17) S K 2 5 の東側 8m で検出した。平面形態はほぼ正方形の隅丸で長軸 2.6m、短軸 2.5m、深さは 56cm である。覆土は黒褐色粘質土・にぶい黄褐色土・黑色粘土・黒色粘土（黄褐色土）の順で堆積している。遺物は弥生土器・珠洲焼・中世土師器・木製品・植物遺体（種子）が出土している。植物遺体は上層部に集中して出土している。

S K 1 9 (第 7 図・写真図版 15) S K 0 2 の南東 1m で検出した。平面形態は楕円形で、長軸 80cm、短軸 70cm である。深さは 30cm である。遺物は弥生土器・土師器がある。

S K 2 1 (第 8 図・写真図版 15) S D 2 1 の東側 3m で検出した。平面形態は方形で、長軸 96cm、短軸 90cm である。断面形態はコの字状で、深さは 80cm である。覆土は、1 層は茶褐色土、2 層は黒褐色土（青灰色砂質ブロック含む）、3 層は黒褐色粘質土、4 層は黑色粘土（青灰色粘質ブロック含む）、5 層は黒褐色粘土である。ほぼ水平に堆積している。

遺物は 2~5 層に含まれており、珠洲焼・木製品（下駄・曲物の底板・棒状木製品・板状木製品な

ど) が出土している。下駄や底板は 5 層に含まれる。

S K 2 4 (第 8 図・写真図版 17) S K 0 5 の東側約 5m で検出した。平面形態はほぼ円形で長軸 58cm、短軸 50cm である。断面形態は円筒状で、深さは 25cm である。覆土は黒褐色土、黒色土を基調としている。土師器、珠洲焼の甕の口縁部、中世土師器、木製品が出土している。

杭 列

杭列 1 (第 10 図・写真図版 18~20) S D 0 1 のコーナー付近で検出した。杭は 13 本確認した。杭列 A (杭 1~杭 6~杭 11)、杭列 B (杭 2~杭 5)、杭列 C (杭 4~杭 10)、杭列 D (杭 3~杭 9~杭 13)、杭列 E (杭 8~杭 12) がほぼ直線的に並び、杭列 A と杭列 B、杭列 C と杭列 D は平行に並んでいる。

これらの杭は、掘方がなく、地面に直接打ち込まれている。杭列 A の杭 1、杭 11 はやや東側に傾いている。杭 1 と杭 6 は 1.6m、杭 6 と杭 11 は 90cm、杭 1 と杭 11 は 2.5m を測る。杭列 B は距離が 1.1m である。ともにやや西側に傾いている。杭列 C は距離が 1.3m である。ともにやや東側に傾いている。杭列 D は杭 3 と杭 9 間は 1.4m、杭 9 と杭 13 間は 1.36m を測る。杭列 E は 1.42m を測る。

杭列 2 (第 10 図・写真図版 18~20) 杭列 1 の西側 m で検出した。杭は 10 本確認している。杭 2~杭 5~杭 7 (杭列 F)、杭 3~杭 4~杭 6~杭 8~杭 9 (杭列 G) がほぼ直線的に並び、これら杭列はほぼ平行に並んでいる。杭列 F の杭 2 と杭 5 間が 63cm、杭 5 と杭 7 間が 64cm を測る。杭列 G の杭 10~杭 3 の間が 48cm、杭 3 と杭 4 の間が 32cm、杭 4 と杭 6 の間が 80cm、杭 6 と杭 8 の間が 40cm、杭 8 と杭 9 の間が 20cm である。

ii) 居館外

獨立柱建物

S B 0 1 (第 11 図・写真図版 21) 調査区の西端で検出した。居館の北側に隣接し、堀肩から約 2m 離れている。建物は梁間 2 間、桁行 3 間の總柱建物と想定される。東側柱列の柱穴の一部は確認できなかった。建物は南北棟である。建物規模は、梁間 3.67m、桁行 5.48m である。梁間の柱間は東から 1.80m、1.87m、桁行の柱間は北から 1.90m、1.80m、1.78m である。柱穴深度は、P 1 で遺構検出面から 26.9cm、P 2 で同様に 35.8cm を測る。もっと浅いのは P 7 で 6.3cm である。柱痕跡は P 1 と P 2 で確認しており、柱の直径は約 12cm と推定できる。

S B 0 2 (第 11 図・写真図版 21) 調査区の東側で検出した。居館の東側に隣接し、堀肩から約 10m 離れている。柱穴は逆 L 字状に 5 つ並んでおり、建物か柵列と考えられる。

建物とした場合は、梁間 2 間、桁行 2 間の建物と想定できる。東側と南側の柱穴列を確認したことになる。建物規模は梁間 4.36m、桁行 4.38m である。建物は東西棟になる。梁間の柱間は北から 2.08m、2.28m、桁行の柱間は東から 2.2m、2.18m になる。建物面積は約 19 m² になる。

柵列とした場合は、逆 L 字状になり、小法は建物の値と変わらない。

柱穴の深度は、遺構確認面から、13~22cm と浅い。

溝 締

S D 1 0 (第 17 図・写真図版 27) 調査区の東側で検出した。この溝は S D 0 2 に北部分を切られている。溝は南北に延び、調査区外北、南方向にともに延びるものである。溝は調査区の南東から始まり、北方向に延びて、33m の地点で、ほぼ直角に西に折れ、17.5m 延び、再びほぼ直角に北に折れ、北方向に延びていく。溝の幅は 2.6m である。この溝は、平成 10 年度調査区に統いていくこととなる。遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、珠洲焼、中世土師器、青磁、木製品、越中瀬戸焼がある。

S D 1 3 (第 14 図・写真図版 27) 調査区の東側で検出した。S B 0 2 の東約 4m の地点である。溝は南北に延び、調査区外南にも延びる。確認した部分は長さ 14.3m、幅 1.2~1.5m である。調査区南端から延び、SK 1 5 の 90cm 手前でストップする。遺物は珠洲焼、中世土師器、木製品が大量にある。

S D 1 4 (第 14 図・写真図版 27) 調査区の東側で検出した。SK 1 5、SK 2 0 と切り合い関係がある。遺物は、弥生土器、中世土師器、木製品がある。

S D 1 5 (第 17 図・写真図版 27) 調査区の東側で検出した。南東から北西方向に延びる溝である。長さ 4.5m、幅は 50~60cm である。

S D 1 6 (第 17 図・写真図版 27) 調査区の東側で検出した。SD 1 5 の西側で、ほぼその溝と平行に走っている。溝は調査区外南側に延びている。確認した部分の長さは 3.0m で、幅 40cm である。遺物は木製品がある。

S D 1 7 (第 17 図・写真図版 21) 調査区の東側で検出した。SD 0 1 の東 7m の地点である。溝は南西から北東方向に 11m 延びる溝と南東から北西方向に 3m 延びる溝が T 字状に連結した溝である。深さは約 15cm と浅い。

S D 1 8 (第 17 図・写真図版 27) 調査区の東側で検出した。SD 1 0 の西側約 14m の地点をほぼ平行に走っている。南端は SD 1 3 によって切られている。長さは 24.3m、幅 50cm である。深さは約 15cm である。遺物は、珠洲焼がある。

S D 1 9 (第 17 図・写真図版 27) 調査区の東側で検出した。SD 1 8 の西側約 7m の地点をほぼ平行に走っている。長さは 9.6m、幅 40~50cm である。遺物は、弥生土器がある。

土坑

S K 0 6 (第 12 図・写真図版 24) 調査区の東側で検出した。隅丸方形で、長軸 56cm、短軸 54cm、深さ 11cm である。土坑内には、長軸 20cm 程度の面長な石や直径 10cm 程度の円形の石、珠洲焼、木製品が出土している。

S K 0 9 (第 12 図・写真図版 4) 調査区の西側で検出した。SK 1 0 の北東 5m の地点である。隅丸方形で長軸 4.2cm、短軸 2.4cm、深さ 10~17cm である。覆土は黒色土が主体である。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、木製品がある。

S K 1 0 (第 12 図・写真図版 22~23) 調査区の西側で検出した。SD 0 1 の北、約 5m の地点である。梢円形で長軸 5.7m、短軸 4.0m、深さ 15~35cm である。遺構の中央には試掘溝があり、遺構を若干破壊している。遺構の南西部では中世土師器が集中して出土した。中世土師器が集中する範囲は東西、南北とも 1.5m 四方の範囲である。完形品ものは少なく、破片になっているものが多い。土師器の総点数は 160 点にも及ぶ。遺構覆土は肩から内側 1.5~2.0 の範囲では黒色土が堆積し、その上部には暗灰褐色土かが堆積している。中世土師器の廃棄は黒色土中に見られる。

遺物は中世土師器のほかに、須恵器、珠洲焼、木製品、金属製品がある。

S K 1 1 (第 12 図・写真図版 4) 調査区の西側で検出した。SK 10 の北、約 9m の地点である。ほぼ円形で、直径約 90cm、深さ 30cm である。覆土は黒色土を主体とし、上層には橙褐色粒子を含んでいる。遺物は須恵器、木製品がある。

S K 1 2 (第 12 図・写真図版 30) 調査区の西側で検出した。SD 0 1 の北、約 50cm の地点である。ほぼ円形で、直径約 1.4 m、深さ 30cm である。遺物は弥生土器がある。

S K 1 5 (第 14 図・写真図版 29) 調査区の東側で検出した。SK 2 0 と切り合い関係がある。遺物は木製品が出土している。

S K 1 6 (第 12 図) 調査区の東側で検出した。S B 0 2 の西側に隣接する。梢円形で長軸 1.24 m、

短軸 93cm、深さ 35 cm である。遺物は木製品が出土している。

S K 2 0 (第 14 図・写真図版 28) 調査区の東側で検出した。S K 15 と切り合い関係がある。遺物は中世土師器、青磁、木製品がある。

S K 2 2 (写真図版 31) 調査区の北側で検出した。長円形で、長軸 1.1 m、短軸 67cm、深さ 40 cm である。トチの実が出土している。

(4) 遺物

遺物は、縄文時代から江戸時代のものが出土している。縄文上器・打製石器・石簇・ヒスイ原石・弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器・十輪・中世土師器・瓦質土器・珠洲焼・越前焼・美濃焼・灰釉陶器・青磁・白磁・越中瀬戸焼・砥石・硯・木製品・金属製品・古錢がある。

i) 遺構の遺物・居館内

堀跡

S D O 1 須恵器・土師器・珠洲焼・中世土師器・越前焼・青磁・金属製品・木製品が出土している。金属製品は小柄が出土している。刃の部分は腐食が激しい。木製品は曲物の底板が出土している。直径 11.5 cm、厚さ 5 mm を測る。ほぼ完形である。また、棒状のものや板状のものが出土している。珠洲焼の出土が最も多い。

溝跡

S D 2 1 弥生土器・須恵器・土師器・珠洲焼・中世土師器が出土している。

井戸跡

S E O 1 中世土師器・古瀬戸・木製品が出土している。古瀬戸は御皿、木製品は漆皿である。漆の残りはあまりよくない。

曲物の底板は 2 点出土している。1 点はほぼ完形であるが、もう 1 点は半分が残る。完形に近いものは、直径約 23 cm で、厚さは 5 mm である。両面とも丁寧に削られている。

鍔先は、井戸の底面部から出土した。形態はほぼ長方形で、長辺 40 cm、短辺 20 cm を測る。板のほぼ中央には、2 cm 四方の穴が、2 点開いている。

用途が不明のものでは、台形をしたものがある。下辺は 24.5 cm、上辺は 5 cm、高さは 4.2 cm を測る。中央よりやや下には、ほぼ均等に直径 2 mm の穴が四つ開いている。穴と穴の間は 6 から 7 cm を測る。

S E O 2 珠洲焼・中世土師器・木製品が出土している。木製品は箸状木製品・杭状木製品・小型の曲物・編物（籠）などが出土している。

長辺 20 cm、短辺が 3.5 cm の板状の木製品がある。また、幅 2 mm の薄い板材があり、細長い穴があいており、木のひもでその穴をふさいでいる。幅 5.5 cm、長さ最大で 12 cm、厚さ 5 cm の角材があり、先端が火をうけたらしく、焦げている。

土坑

S K O 1 弥生土器・須恵器・土師器・珠洲焼・中世土師器・青磁・木製品・ヒスイ原石が出土している。木製品は曲物の外側に使われるような、非常に厚さの薄いものが見られる。最も長いもので 2 m を越すものもある。

S K O 2 弥生土器・土師器・珠洲焼・中世土師器が出土している。

S K O 5 弥生土器・土師器・中世土師器・木製品が出土している。漆皿が 2 点出土している。直径 9.3cm、器高 1.5cm、厚さ 2 mm 以下である。内面には朱漆で「三ッ盛 丸に三ッ巴」紋が描かれており、「三ッ巴紋」の 1 つの直径は 1.5~1.6cm である。漆塗りの横櫛が 1 点出土している。巾 4.3cm、厚さ 9 mm、齒長は最大で 3.6cm、長さは 6.25cm である。

箸状木製品が約 200 点出土している。両端を加工するもの、片方のみ加工するものが見られる。長さは 14 cm 代から 20 cm 代まで見られる。箸の断面形態は、丸いもの、四角いものの二通りに分けられるが、後者のものは数が少ない。

SK17 青生土器・珠洲焼・中世土師器・木製品・植物遺体（種子）が出土している。

SK21 珠洲焼・木製品が出土している。木製品は下駄がある。下駄は逆齒下駄である。台部の平面形態は橢円形で、台長は 23.2 cm を測る。台全部は 4.5 cm、台央部は 10 cm、台後部は 9 cm を測る。鼻緒がつく先の穴は直径 5 mm の穴であるのに対して、後ろの方は一辺 1.2 cm の四角い穴が開いている。台部は 1 cm、歯部は 2.2 cm を測る。歯は後ろ方が前歯よりもかなり磨り減っている。

SK24 珠洲焼が出土している。

居館外

溝跡

SD10 須恵器・土師器・青磁・木製品・越中瀬戸焼が出土している。長さ 20.6 cm、巾 4 cm、厚さ 2.1 cm の棒状木製品である。ほぼ中央には巾 1.9 cm、長さ 3.2 cm ほど穴があいている。

SD13 木製品が出土している。巾 7.7 cm、長さ 20.9 cm、厚さ 3 mm の板状木製品である。

SD14 木製品が出土している。箸状、板状、棒状のものがある。

SD15 珠洲焼・青磁・木製品などが出土している。

SD16 木製品が出土している。

SD17 木製品が出土している。

SD18 木製品が出土している。

SD19 中世土師器・木製品が出土している。

土坑

SK06 木製品が出土している。

SK10 中世土師器・金属製品・木製品・植物遺体が出土している。中世土師器は破片を含めて、約 300 点出土している。ロクロ土師器と非ロクロ土師器に大きく区分され、さらに器形では大きく 4 つのタイプに区分される。口径は 7 cm 代、8 cm 代、9 cm 代、10 cm 代、11 cm 代、12 cm 代に分けることができる。

金属製品は、棒状のものである。

SK11 須恵器・木製品が出土している。

2. 第2次調査（平成10年調査）

（1）調査の方法

調査は平成10年4月2日より開始した。重機（バックホウ）により、第1層を除去した後、人力によって遺物包含層（第2層）を掘り下げ、遺構を検出した。各遺構は土層実測、遺物実測、写真撮影などの発掘調査を実施した。調査区全域の発掘調査終了後に、空中写真撮影を実施して調査は同年6月15日に終了した。

（2）基本層序

基本層序は、第1層が水田耕作土で40cm、第2層は黒色土（遺物包含層）は10～15cm、第3層は灰褐色砂質シルト（遺構確認面）で20cm、第4層は黒色土砂となる。

（3）遺構

第2次調査では、川跡、道路跡、井戸跡、十坑などを検出した。

道路跡

SFO1（第16図・写真図版40～42）調査区の北西部分で検出した。道路跡は東西に延びるものと考えられる。少なくとも2時期の道路跡が想定できる（便宜的に旧道路跡をⅠ期、新道路跡をⅡ期とする。）。両時期の道路跡とともに、東側はSD00にぶつかって途切れ、西側は、おそらく延びているものと想定できるが、後世の川跡によって切られており、はっきりせず、かろうじて側溝の痕跡を捉えることができる。

Ⅰ期の道路跡は、路面幅は3.8～4.1mを測り、約5°南方向に傾く。路面上はほぼ水平で、石を敷き詰めたりなどの舗装的なものはなされていないようである。硬化面も確認できなかった。道路跡の両側には側溝があり、北側側溝（SD10）は、約4m分検出し、幅は約1mを測る。深さはcmである。遺物は中世土師器・木製品がある。南側側溝（SD11）は、約19m分検出し、幅は70cm～1mを測る。深さはcmである。側溝の東端から約8mの地点に自然木が横たわって出土している。南側側溝を南北に横切るための木道的施設と考えられる。覆土は黒灰色シルトである。遺物は珠洲焼・木製品ある。

Ⅱ期の道路跡は、Ⅰ期の路面の上に構築され、約20°南方向に傾く。Ⅰ期の道路跡よりもかなり南に傾く。路面幅は約4.4mを測る。Ⅰ期よりもやや幅が広い。Ⅰ期同様、路面上に舗装的痕跡は確認できなかった。両側に側溝がある。北側側溝（SD15）は、Ⅰ期の路面上に構築されており、長さ12.8m、幅40～60cm、深さcmを測る。南側側溝（SD12）は、Ⅰ期の南側側溝を切って構築されており、長さ6.3m、幅50cm～1m、深さcmを測る。覆土は黒灰色土が主体である。

道路跡は、東側はSD05にぶつかって途切れるが、そのSD05の西層部分で、杭が3本、地面に突き刺された状態で出土しており、SD05に架かっていた橋脚の痕跡ではないかと考えられる。どちらの時期の道路跡に伴うものであるかは、不明である。

井戸跡

SEO1 (第15図・写真図版34~35) 調査区の南西部分で検出した。井戸跡は調査区外南西方向に延びる。素掘り井戸で、平面形態は、ほぼ円形である。調査区ではほぼ半分を検出した。直径は1.15~1.2m。深さは最も深いところで、60cmを測る。底面は水平ではなく、北東方向から40cm掘りこんだ後、井戸の南東部分をさらに20cm掘りこんでいる。覆土は黒色土が堆積している。

遺物は、箸状木製品や曲物の底板など約120点にも及ぶ木製品が出土している。

溝跡

SDO1 (第18図・写真図版33) 調査区のほぼ中央部分で検出した。南北溝である。溝は南西から北東方向に4.5m延び、そこで北方向にほぼ直角に折れ、北方向に18.0m延びる。その地点でやや東方向に傾き4m延び、さらに北方向に7.0m延びる。溝は調査区外北方向に延びていく。幅はcmを測る。

SDO2 (第18図・写真図版36~37) 調査区のほぼ中央部分で検出し、SDO1の西約2mの地点である。南北溝で、SDO5を切って形成される。長さ24.7m、幅1.8~2.5mを測る。珠洲焼や木製品が出土している。

SDO5 (第18図・写真図版38~39) 調査区のほぼ中央部分で検出した。南北溝で、SDO2に東脛を切られている。長さは26.8m、幅は2m以上である。深さは35~40cmを測る。覆土は黒灰色粘質土、黒灰色土の順で堆積している。土層観察によると、少なくとも1度は改修されている。

珠洲焼や木製品などが出土している。

SDO9 (第18図・写真図版33) 調査区のほぼ中央部分、SDO5の西側で検出した。溝は、東から西方向に2.4m延びた地点からほぼ直角に北方向に折れ、約10.5m延びる。溝は直線的ではなく、やや弓なり状で、西側に膨らむ。幅は26~80cmである。深さは7~10cmである。

土坑

SKO1 (第18図・写真図版33) 調査区の南端部分で検出した。SDO1に切られている。平面形態は長方形で、長さ2.35m、幅45~55cmを測る。上坑の北半分は浅く、南半分は深い。土坑の南端ではほぼ水平に置かれた竹材が出土している。覆土は黒色粘質土を主体としている。

SKO6 (第18図・写真図版43) 調査区の南端部分で検出した。SDO5の西側3.5mの地点である。平面形態は楕円形で、長軸1.36m、短軸1.01m、深さ39cmを測る。覆土は黒灰色土、黒黄褐色粘質土の順番で堆積している。最下層(黒黄褐色粘質土)には、珠洲焼、箸状木製品が含まれている。

SKO9 (第15図・写真図版33) 調査区の北部分で検出した。SF01の南1mの地点である。平面形態は隅丸方形で、長軸1.52m、短軸1.09m、深さ20cmを測る。覆土は黒色土が主体となる。曲物の底板や箸状木製品などが出土している。

SK10 (第18図・写真図版33) 調査区の西部分で検出した。遺構ラインは不明であるが、弥生土器の廃棄が見られる。

SK15 (第18図・写真図版44) 調査区の北東部分で検出した。上坑は調査区外東側に延びる。不整形な土坑である。土坑の南西隅に弥生土器の廃棄が見られる。

(4) 遺物

遺物は、縄文時代から江戸時代のものが出土している。縄文土器・打製石器・弥生土器・剥片・すり石・土師器・須恵器・土鐘・中世土師器・瓦質土器・珠洲焼・越前焼・美濃焼・灰釉陶器・青磁・白磁・越中瀬戸焼・砥石・硯・木製品・金属製品・古錢がある。

遺構の遺物

井戸跡

S E O 1 珠洲焼・木製品が出土している。木製品は約 120 点出土している。箸状木製品・曲物の底板・鋸先・板状木製品などが出土している。箸状木製品は両端を加工してるのがほとんどである。箸の長さは、14cm 代から 21cm 代のものがあり、最も短いもので、14.9cm、最も長いもので 21.3 cm である。

曲物の底板は 2 点出土している。1 点はほぼ完形であるが、もう 1 点は半分が残る。完形に近いものは、直径約 23 cm で、厚さは 5 mm である。両面とも刃寧に削られている。

鋸先は、井戸の底面部から出土した。形態はほぼ長方形で、長辺 40 cm、短辺 20 cm を測る。板のほぼ中央には、2 cm 四方の穴が、2 点開いている。

用途が不明のものでは、台形をしたものがある。下辺は 24.5 cm、上辺は 5 cm、高さは 4.2 cm を測る。中央よりやや下には、ほぼ均等に直径 2 mm の穴が四つ開いている。穴と穴の間は 6 から 7 cm を測る。

溝跡

S D O 1 木製品が出土している。曲物の底板が出土している。ほぼ半分が残っていた。直径 20 cm、厚さ 5mm を測る。二つに折れており、遺物の依存状態はよくない。

S D O 2 珠洲焼・中世土師器・木製品が出土している。

S D O 5 珠洲焼・木製品が出土している。板状木製品がある。形態は長方形で、長辺が 29cm、短辺が 3.5 cm を測る。また、幅 2 mm の薄い板材があり、細長い穴があいており、木のひもでその穴をふさいでいる。幅 5.5 cm、長さ最大で 12 cm、厚さ 5 cm の角材があり、先端が火をうけたらしく、焦げている。

S D O 9 中世土師器・珠洲焼・木製品が出土している。

土坑

S K O 1 珠洲焼・青磁・木製品が出土している。底部からは竹材が出土している。加工痕跡は見られない。

S K O 6 珠洲焼・箸状木製品が出土している。箸状木製品は 2 点出土している。ともに両端を加工している。

S K O 9 木製品が出土している。曲物の底板・箸状木製品が出土している。

S K 1 0 弥生土器が出土している。

S K 1 5 弥生土器が出土している。

包含層の遺物

弥生土器・古式土師器・須恵器・土師器・珠洲焼・中世土師器・青磁・白磁などが出土している。珠洲焼が最も多く出土している。

IV まとめ(第1次調査分)

1. 遺構について

本遺跡では、弥生時代・奈良～平安時代・室町～安土桃山時代の遺構が検出した。

弥生時代…土坑 2、小穴 1 がある。1 つの土坑内からは、数個体分の弥生土器がまとめて出土しており、意図的に廃棄されたものと考えられた。

奈良～平安時代…溝跡 1 がある。室町～安土桃山時代の堀跡に一部壊されている。

室町～安土桃山時代…堀跡 1、掘立柱建物跡 2、井戸跡 3、土坑 13、区画溝 3、その他穴多数がある。各遺構からは、陶磁器類や木製品が数多く出土している。土坑には、桃の種を多く含むものや、トチの実の貯蔵穴などが検出された。

2. 遺物について

本遺跡では、縄文時代から安土桃山時代の遺物が出土している。

縄文時代…縄文後期土器・打製石斧・石鏽・ヒスイ原石

弥生時代…弥生中期～後期土器

古墳時代…古式土師器

奈良～平安時代…土師器・須恵器・土錐

鎌倉時代～安土桃山時代…土師質小皿・瓦質十器(火鉢)・珠洲焼・越前焼・瀬戸焼・美濃焼・灰釉陶器・中国製輸入磁器(青磁・白磁・染付)・越中瀬戸焼・砥石・硯・各種木製品※・各種金属製品(小柄・把手金具・棒状工具・釜)・占銭(元豐通宝)・自然遺物(サルノコシカケ)・種子(トチ・クルミ・ギンナン・モモ・ウリ科種子)

江戸時代初期…越中瀬戸焼

※各種木製品内訳…漆塗椀・漆塗小皿・漆塗櫛・下駄・箸・網代編製品(籠か?)・蓋付小型桶(このわた桶)・各種曲物部品(桶底板など)・杭・棒各種・板各種

3. 居館跡について

発見された堀跡は、戦国時代を中心とした存在した「居館」の周囲をめぐる堀跡と考えられる。

居館とは、在地の領主層あるいは有力武将の館で、堀や土塁を築く防御的色彩の強いものをさす。

この時代の居館の特色として、一辺が半町(約 50m)または 1 町(約 100m)の方形区画の堀を周間に廻らし、堀の内側には土塁を築くものが多い。土塁の内側が居住空間になる。

小西北遺跡の場合全体規模は不明だが、少なくとも半町四方の規模があるものと推定される。

堀は最大幅約 5m、最大深さ約 1m で、東西 40m、南北 11m を確認した。堀の底には、小さな張出しや橋状に高まった浅い部分がいくつもあり、堀の水が淀むような構造になっている。

堀の中からは青磁・珠洲焼・漆塗椀・小柄のほか、焦げた木製品や焼けて壊れた繭が多く出土した。

堀の内側には、幅約 4m の土塁が存在した痕跡を一部に認めた。高さは不明。

居住区域からは、溝・素掘り井戸・土坑・杭列・柱穴などを検出した。土坑は、廃棄穴(ゴミ捨て穴)、水溜穴として使われた。

特に廃棄穴のひとつ(ゴミ捨て穴)には、200 本以上の箸が捨てられており、そのなかに混じ

って漆塗小皿や漆櫛が出土した。

漆塗小皿は、内面中央に「三つ盛り丸に三頭右巴」の文様がベンガラ（酸化鉄）で描かれた製品で、木地の厚さ 1.5mm という非常に高度な削出技術によって製作されている。

別の廐棄穴（土坑 3）からは桃の種子と土師質小皿が多量に出土しており、当時の食生活の一端がうかがえる。

4. 本遺跡の歴史的意味について

小西北遺跡は、戦国時代を中心存在した堀と土塁をもつ有力武家（武将クラス以上か？）の居館跡と推定される。

その根拠は、（1）堀から的小柄の出土、（2）「三つ盛り丸に三頭右巴」紋の漆塗小皿の存在である。（1）は武士が所有する性格のものであること、（2）はこの文様が家紋をかたどったものと考えられ、この家紋が越中守護代家の神保氏へつながるものであることから、武家の色彩が強いと考えるからである。

神保氏の家紋は「三頭右巴」で、婦中町本覚寺蔵の神保長誠（ながのぶ：天文から永禄年間に活躍 16C 代）肖像に描かれている。家紋を漆器などに描く例は江戸時代に比較的多くみられる。

福井県・秉谷朝倉氏遺跡（戦国時代）では朝倉氏家臣の屋敷から朝倉氏家紋（木瓜）を三つ盛りにした紋様を描いた漆塗椀の出土例があり、小西北遺跡出土例もこのようなパターンと考えられる。

一方、江戸時代に著された『越中志微』には、新庄町より約 4km 北西方向の針原中村に、戦国時代ころ神保氏の館が存在したという記録がある。現在までその位置は不明で、塙照夫氏は針原小学校付近を推定している。

小西北遺跡は、上記のような検証から、神保氏または神保氏の有力家臣（武将）の居館ということができるが、これが『越中志微』に書かれた神保館跡そのものかという問題については、その有力な候補のひとつと考えたい。

なお、神保氏は射水・婦負郡を支配し、新川郡の椎名氏との勢力抗争が甚だしかった。天文年間（1532～54）の神保氏の新川郡への進出にはじまる抗争の激化のなかで、この小西北遺跡も整備された居館となり、永禄年間（1558～68）の上杉謙信方の椎名氏の進出、天正 9 年（1581）荒川の合戦以後織田信長方の佐々成政の進出（神保氏張は佐々方の有力家臣）など、めまぐるしい抗争の最前線にあった。

5. 本遺跡周辺の城館資料

『越中志微』 江戸時代末に加賀藩士森田柿園（しえん）（1823～1908）が富山藩内の記録をまとめたもので、成立年代は明治初期（1880～90 年ころ）。

針原館については、「間見雜錄に、針原中村新庄より一里程西方の方、神保一道・同安芸守・同五郎、十二代ここに住す。先祖は富山の神保庶子筋なり。右安芸守東岩瀬に手を延べ城に暫住す。（後略）」とある。この安芸守は神保氏張との説がある。

新庄城跡 太田新城、辰城とも呼んだ。永正 17 年（1520）越後の長尾為景が陣を構え、越中の神保慶宗らを迎撃ったのが初めての記録である。

その後、越後の上杉謙信の越中の拠点としてこの城が重視され、元亀 3 年（1572）にはその有力武将鰐坂長実が居城し、富山城に入った一向一揆勢力に対

峙した。しかし、天正 8 年（1580）織田方の神保長住によって陥落し、佐々成政の手中となった。江戸時代の記録によれば、城の規模は東西約 140m、南北 100m 以上で、本丸と二ノ丸の 2 郡からなる。周囲には土塁と幅約 8m の堀がめぐる。

本丸と推定される高台は、かつて御屋敷山と呼ばれ、現在は新庄小学校グラウンドとなっている。周囲には、古城跡割・古城・馬場・屋敷割などの小字が残る。

大村城跡

戦国時代（16世紀後半）越後の上杉謙信の越中進出に対し、神保氏方の轟田豊後守がこの城を本拠に、水橋・東岩瀬、新庄などに拠って浜街道一帯を防備した。

城跡は、曹洞宗端円寺を中心に 10,000 m² 以上の広さがあったといわれる。周辺には、古城跡割・内堀・外堀、番屋山王宮などの地名があり、境内には土塁が残っている。

江戸時代の『三州志』には、天正 6 年（1578）上杉景勝により陥落したとある。

轟田氏についての伝説に、近くの松原で旅人を苦しめる魔物を退治した「飛びだんご」伝説、謙信がこの城を攻めるとき城より高い山を 築いて城内をうかがったという「そうけ塚」伝説がある。そうけ塚は、日方江天神社の一角にある高台に当時の名残をとどめる。

現在端円寺には、豊後守忠雅の位牌と、平素信仰していた阿弥陀如来の守護仏（鎌倉時代）が伝えられている。なお豊後守の墓は、浜街道に面する精靈塚といわれる。

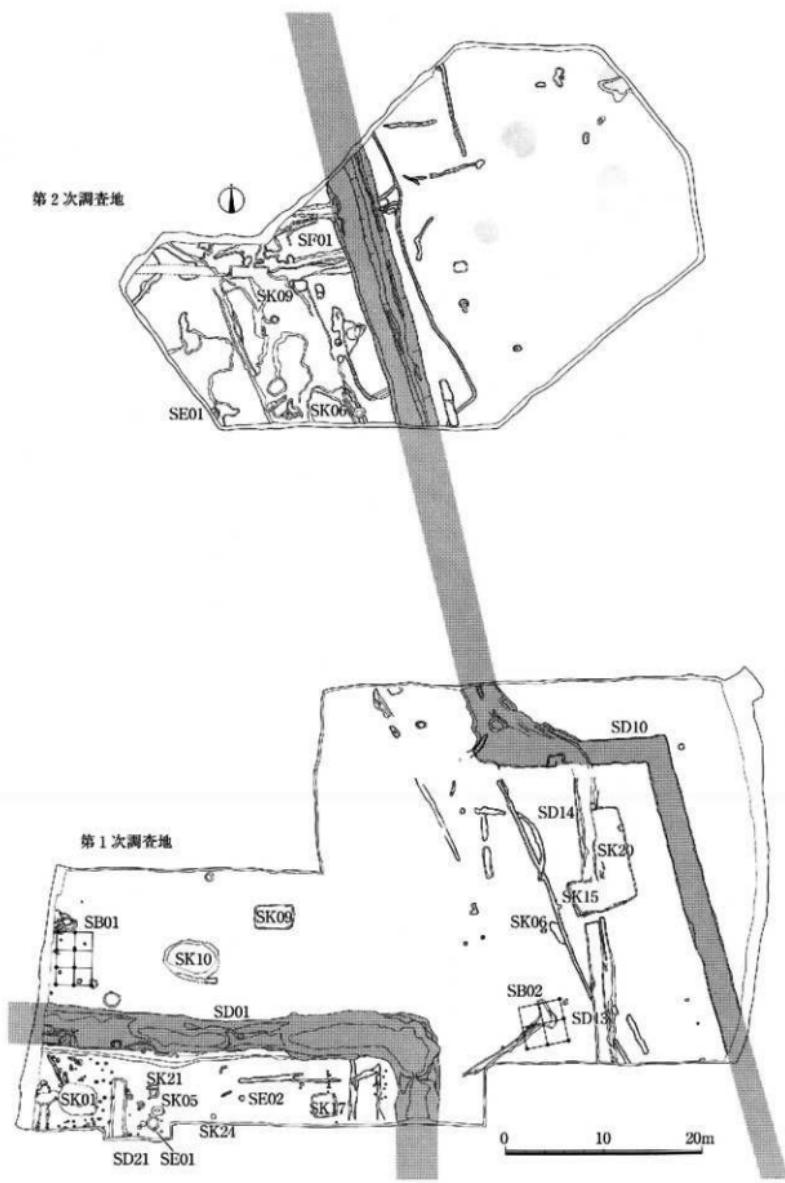
日方江城跡

安土桃山時代の天正年間（1573～91）以前に大村城の山城として成立した。轟田豊後守の居城と伝える大村城の東 400m に位置し、轟田氏の家老あるいは江上重左衛門（萬十郎）の居城であったとされる。

西は崖田川、東は琵琶川の沼地、北は海と天然の要害に囲まれ、浜街道の要所にあった。浄土真宗了照寺境内を中心、南北 80m 東西 70m が城跡とされ、境内の南側から西側にかけて高い土塁と空堀が残る。

寺の南側に空堀と郭、東側に土塁と空堀、富山学園南側に空堀などが残り、築山割・築山烟割・屋敷割など坡に沿って走る小字も多い。

北方の天神社境内には、上杉謙信が大村城内の動静をうかがうために作った「そうけ塚」また南方には、兵が馬の足を洗ったことに由来する「馬橋」などの伝承地がある。



第4図 全体構造配置図(1:500) 網かけ部分は区画溝



第5図 中世における小西北遺跡と周辺の遺跡

戦国武将、神保氏の居館跡か

家紋入り小皿が出土

富山県内で初めて出土した三頭右巴
文様入り漆塗り小皿



富山市教委が整理する市立古文書館の庫裏で、漆塗りの小皿が出土。点が出土しておらず、同市教委は、市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿を発見した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。

「三つ盛り、丸に三頭右巴」

この居館跡はアルベニス福四郎の土蔵も確認され、タジムと国道8号間にた。塗かう小柄り入れたが、少なとも五十糾四が出土しない。居館の造りか、中世の在地の主權か、有力武士の跡みらる。

文様入りの小皿は漆塗りの
側のみ塗て穴があいてある。
文様入りの小皿は漆塗りの
側のみ塗て穴があいてある。

黒漆塗りで、内の中央部にベンガラで描かれており、同市教委は、市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿を発見した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。

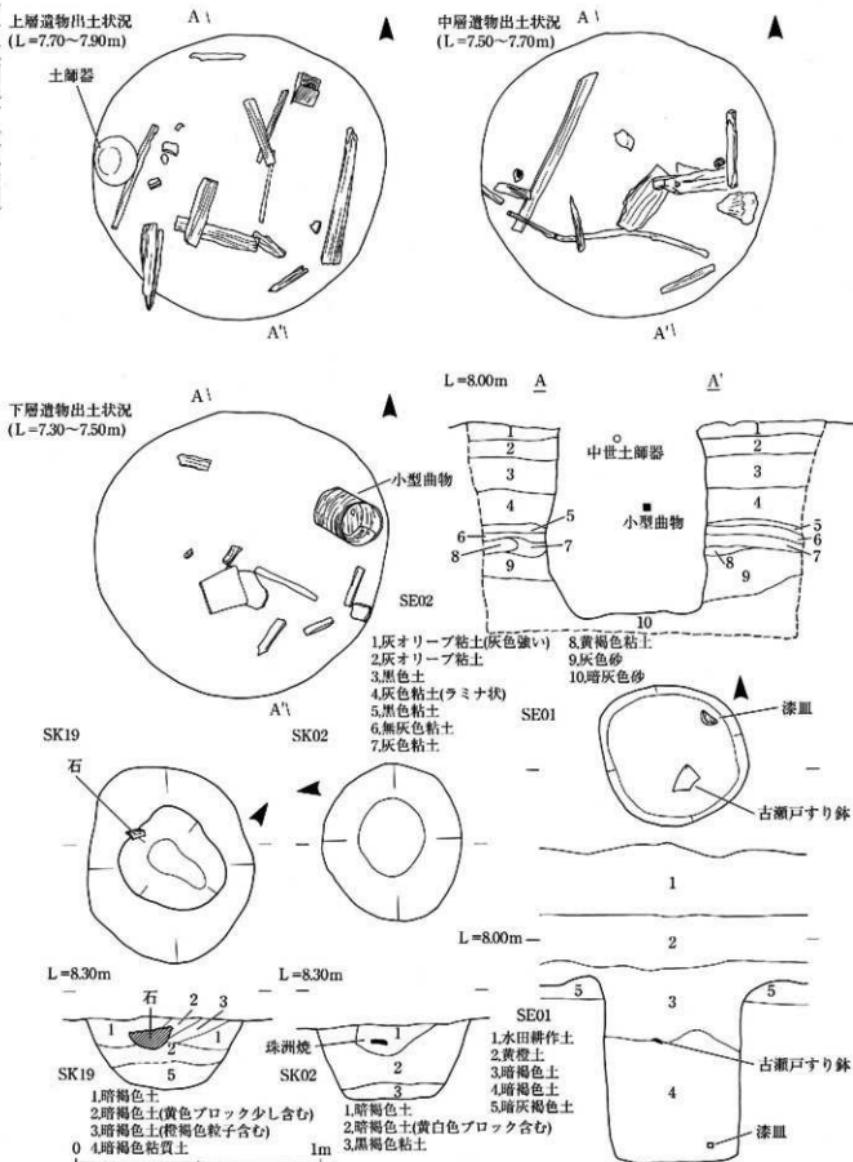
漆塗りの小皿は漆塗りの
側のみ塗て穴があいてある。
文様入りの小皿は漆塗りの
側のみ塗て穴があいてある。

黒漆塗りで、内の中央部にベンガラで描かれており、同市教委は、市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿を発見した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。この小皿は、昭和45年(1970年)、現在の市立古文書館の新築工事で、漆塗りの小皿が出土した。

漆塗りの小皿は漆塗りの
側のみ塗て穴があいてある。
文様入りの小皿は漆塗りの
側のみ塗て穴があいてある。

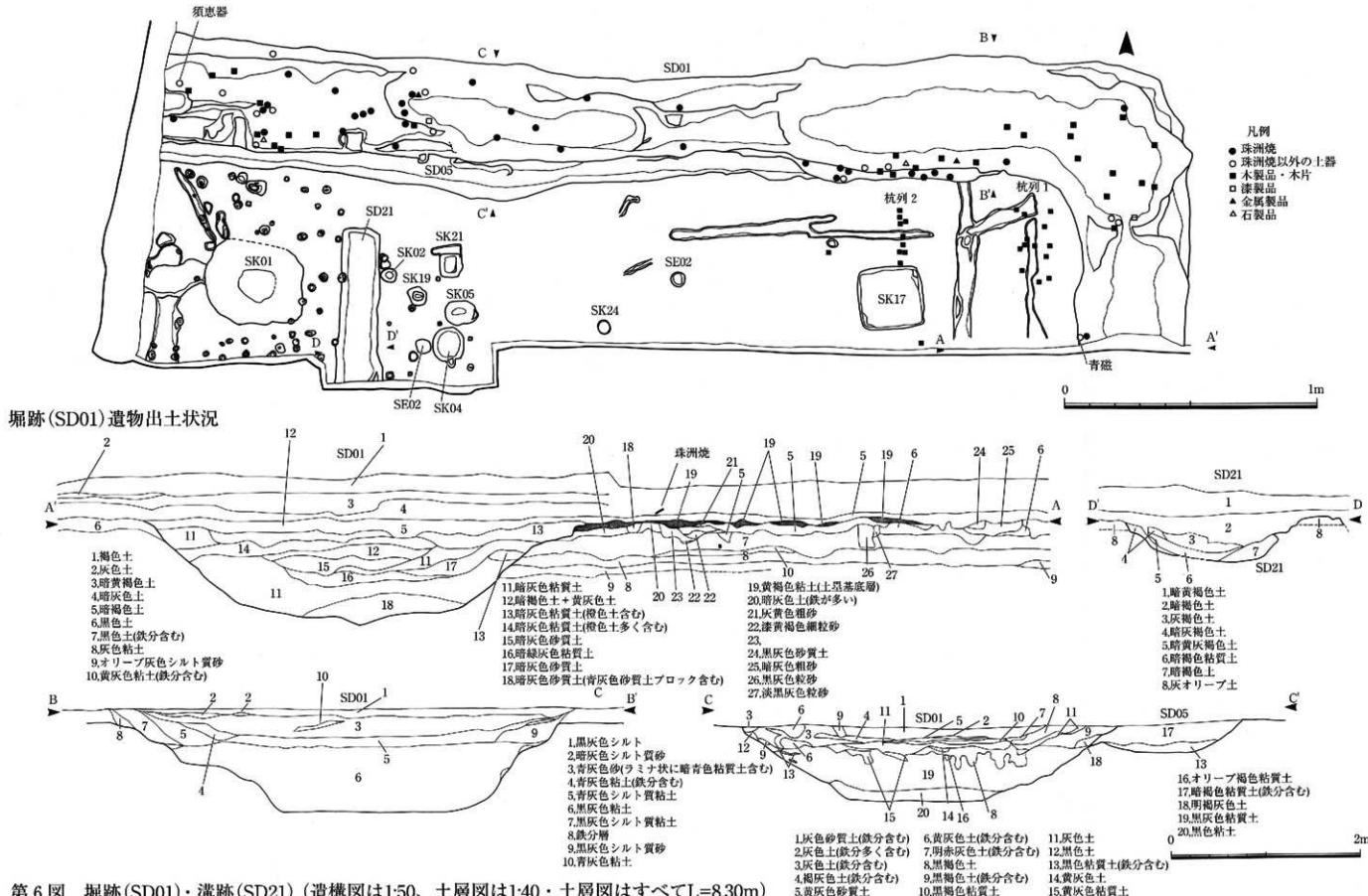


1994年7月9日付富山新聞より

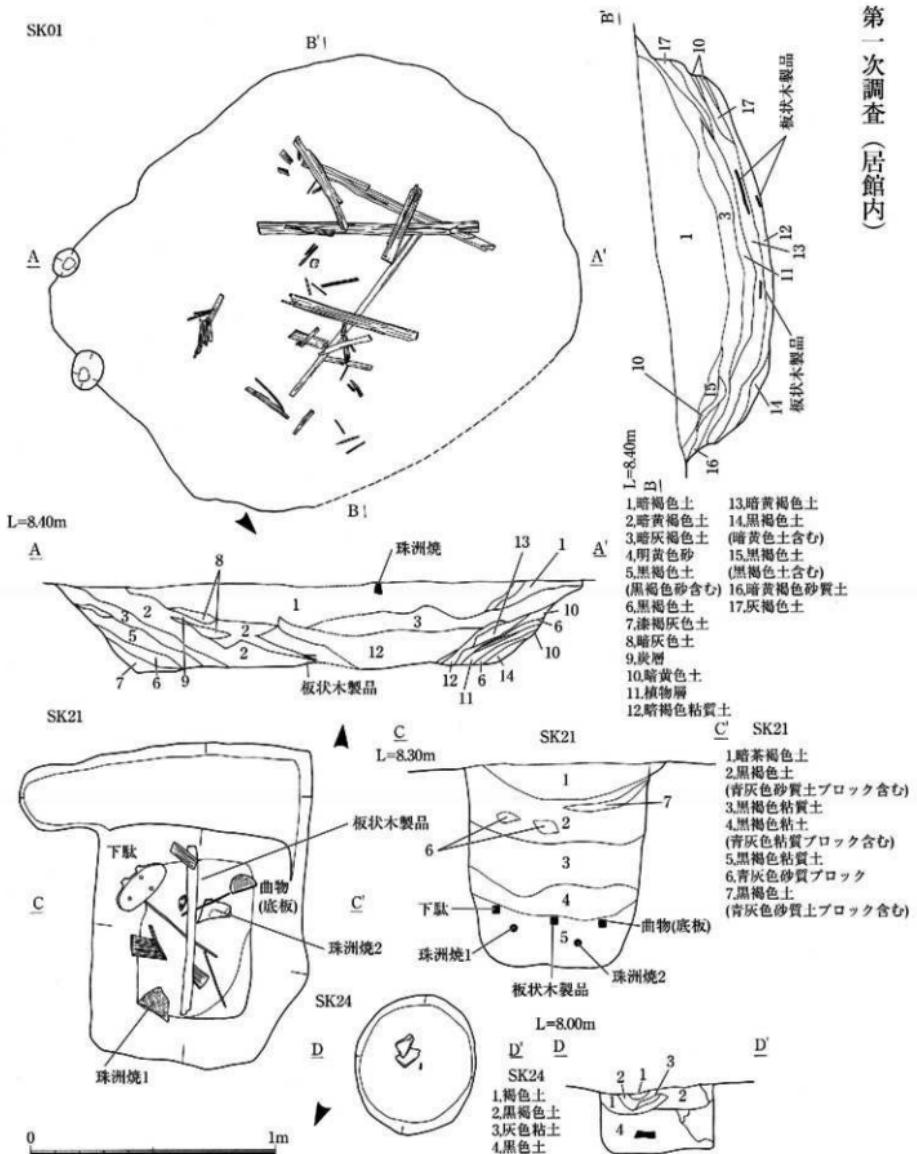


第7図 井戸跡(SE01・SE02)・土坑(SK02・SK19)

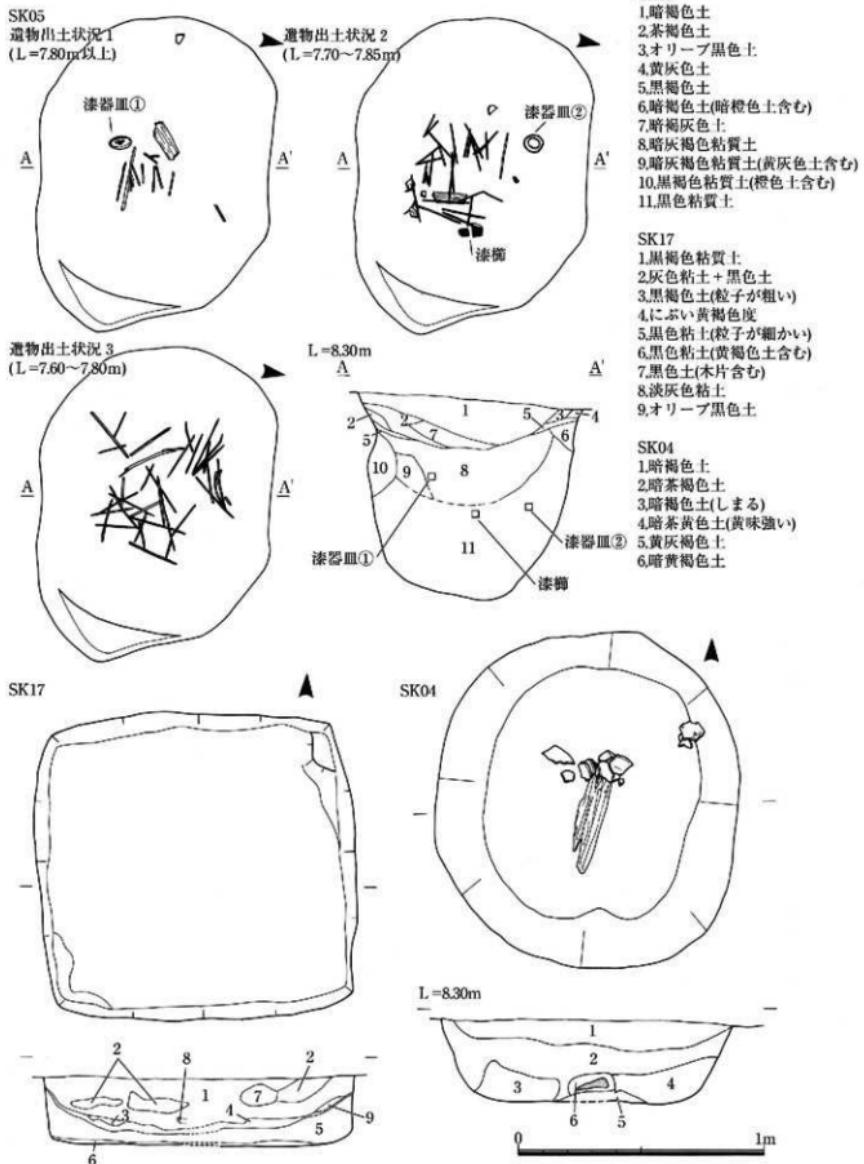
(SE02の断面図は1:40、それ以外は1:20)



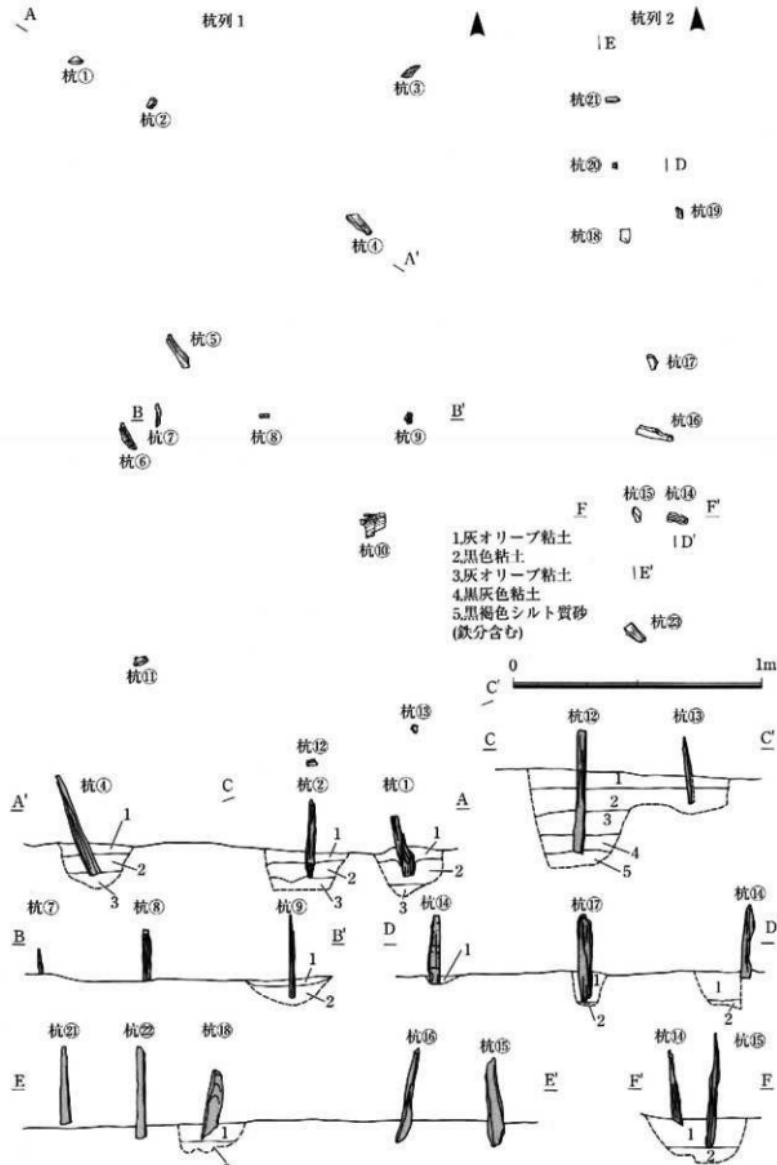
第一次調査(居館内)



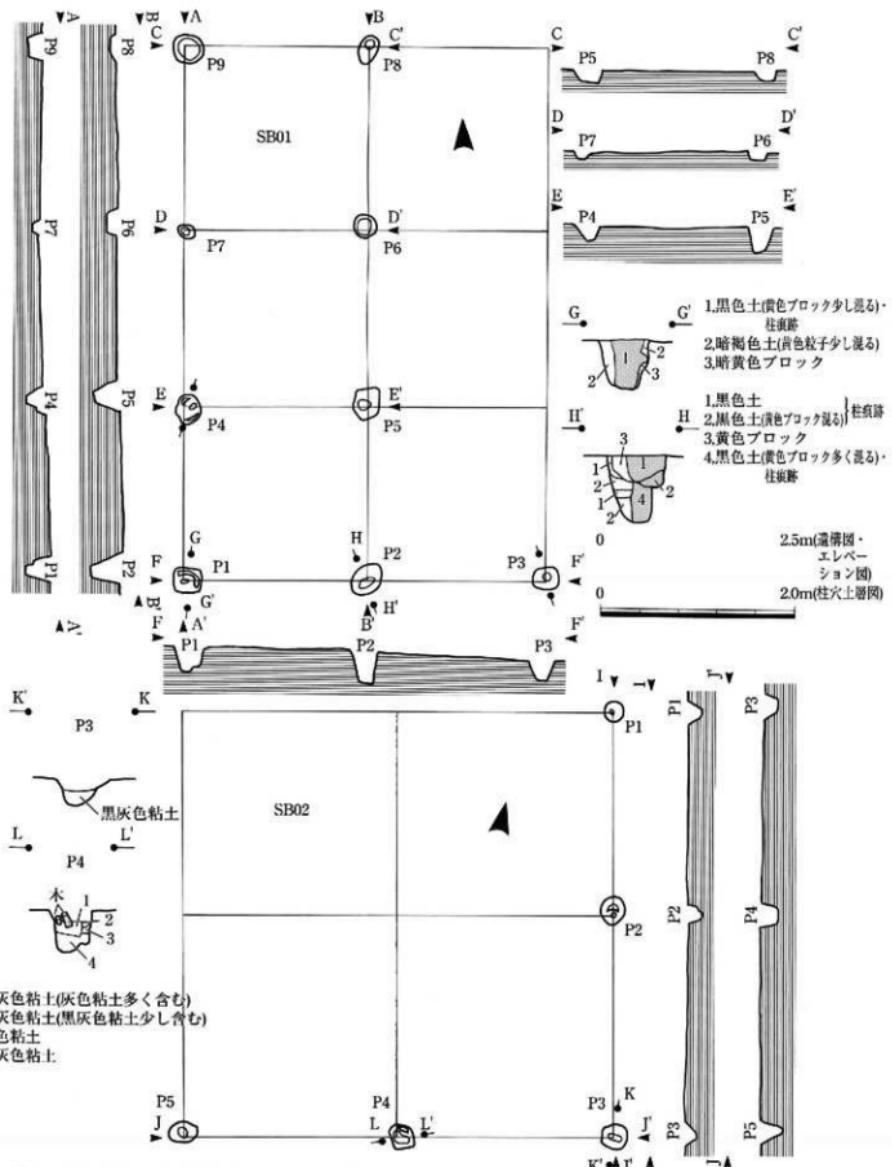
第8図 土杭(SK01・SK21・SK24) (1:20)



第9図 土杭(SK04・SK05・SK17) (1:20)



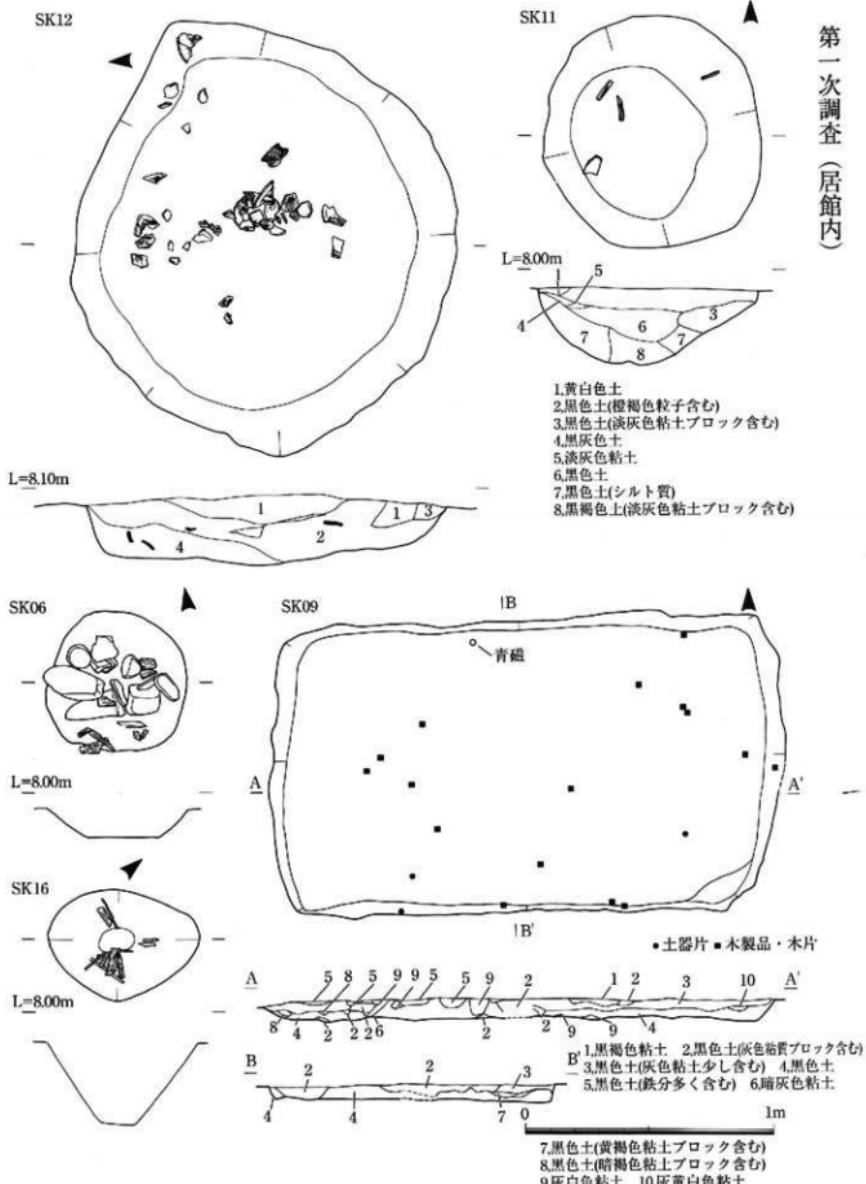
第10図 杭列(杭列1・杭列2) (1:20) すべてL=8.00m



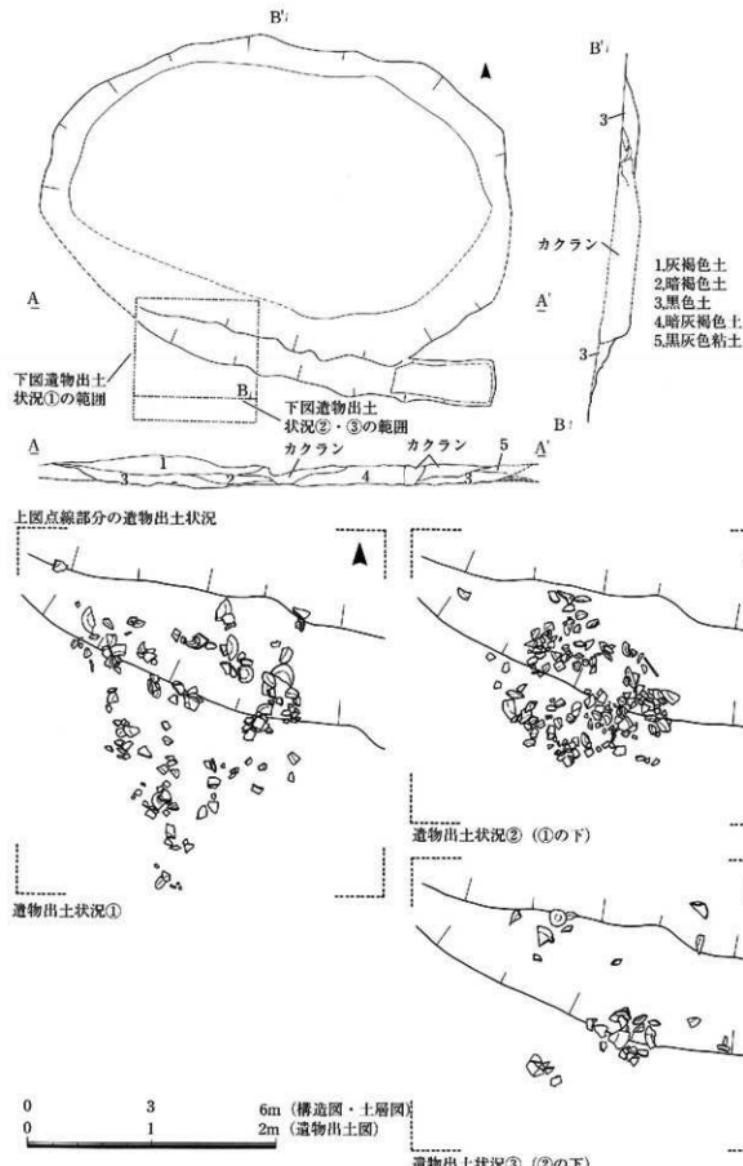
第11図 掘立柱建物(SB01・SB02)

(遺構図・エレベーション図は1:50、柱穴土層図は1:40 すべてL=8.00m)

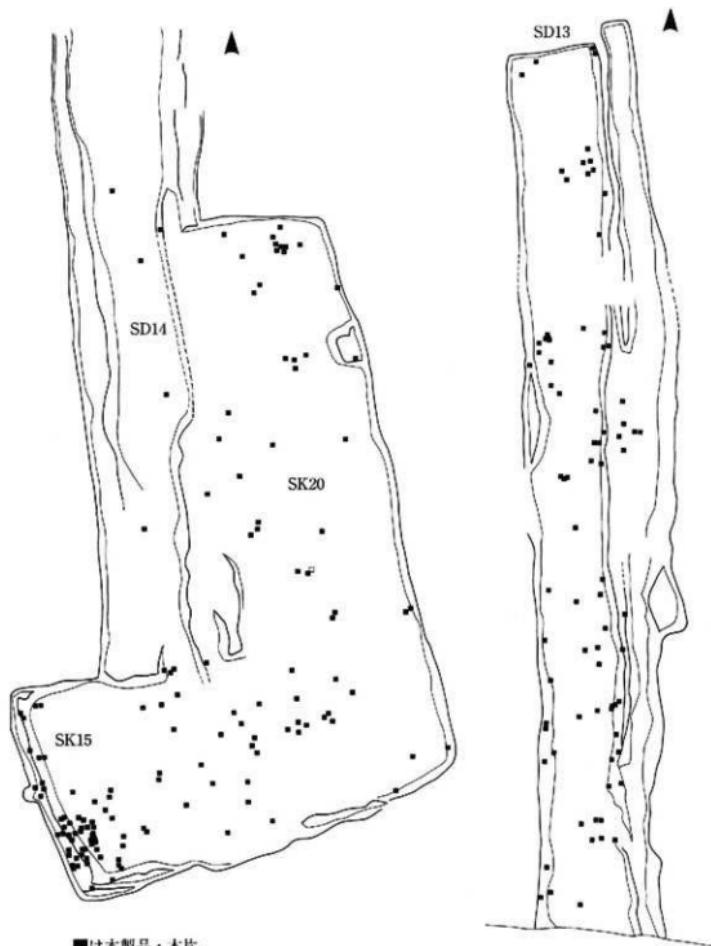
第一次調查（居館内）



第12図 土杭(SK06・SK11・SK12・SK16) (S=1:20)



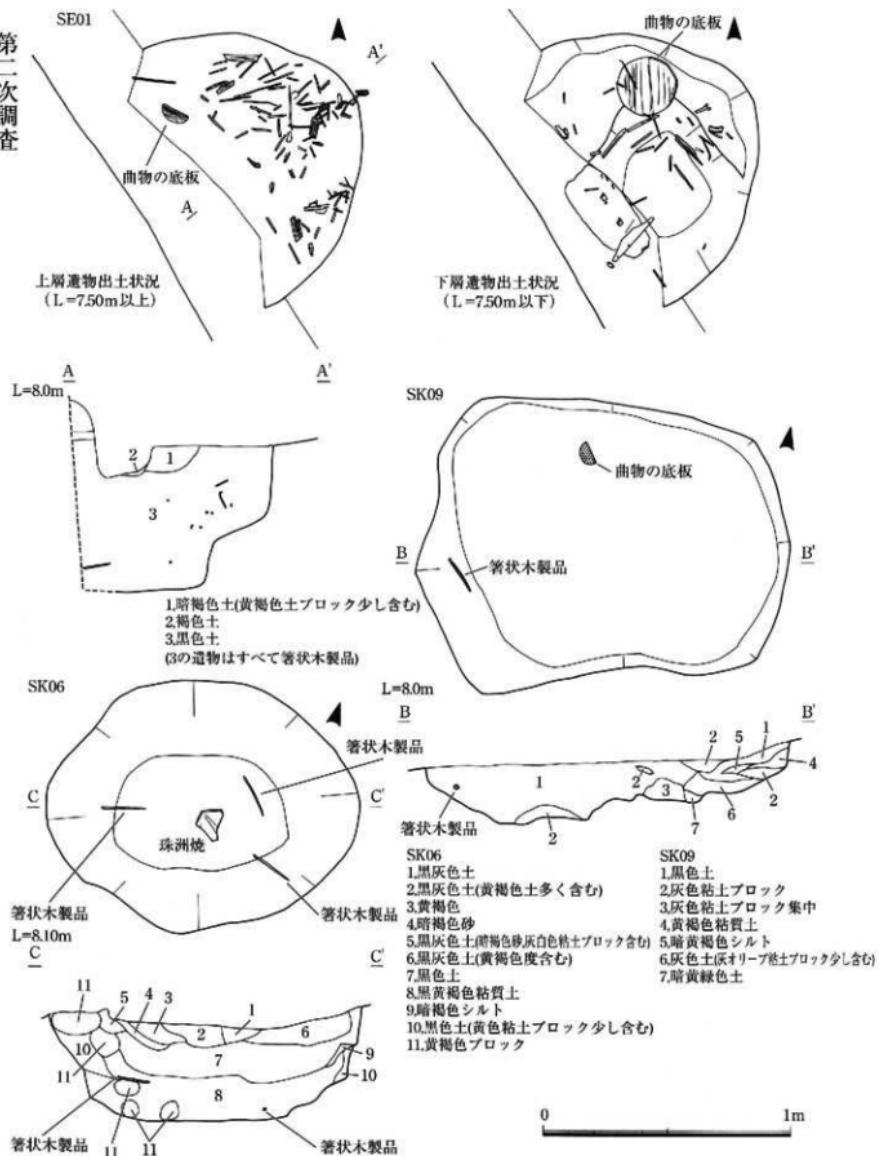
第13図 土杭(SK10)(遺構図・土層断面図は1:60、遺物出土図は1:20)



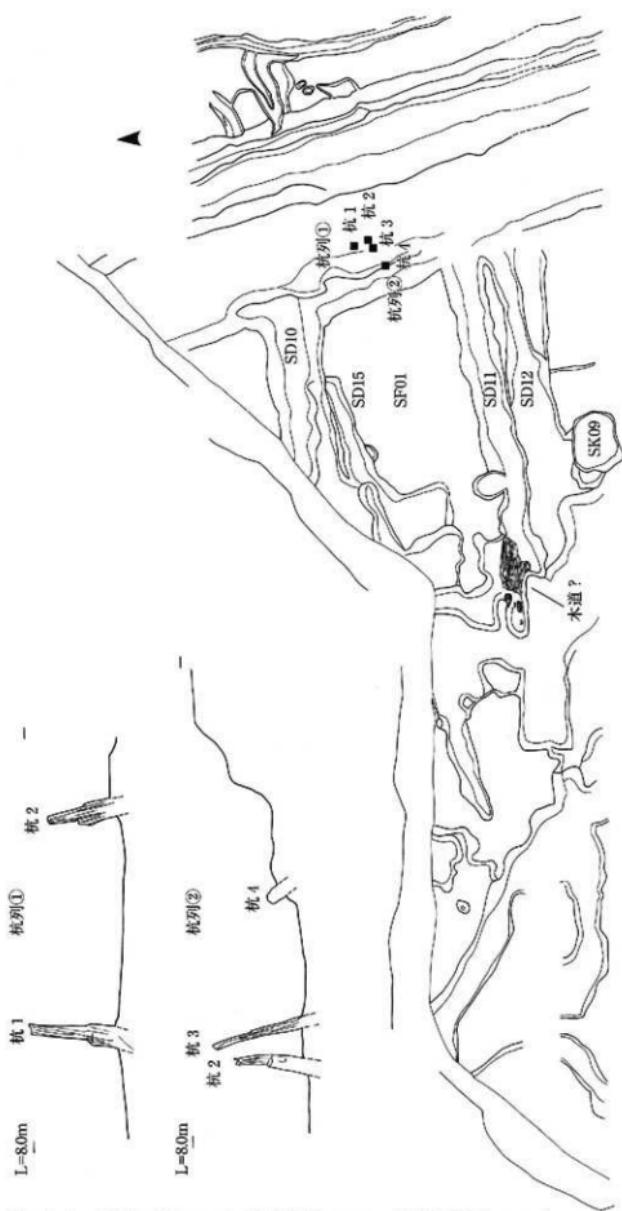
0 4 8m

第14図 溝(SD13・SD14)・土坑(SK15・SK20) (1 : 80)

第一次調查



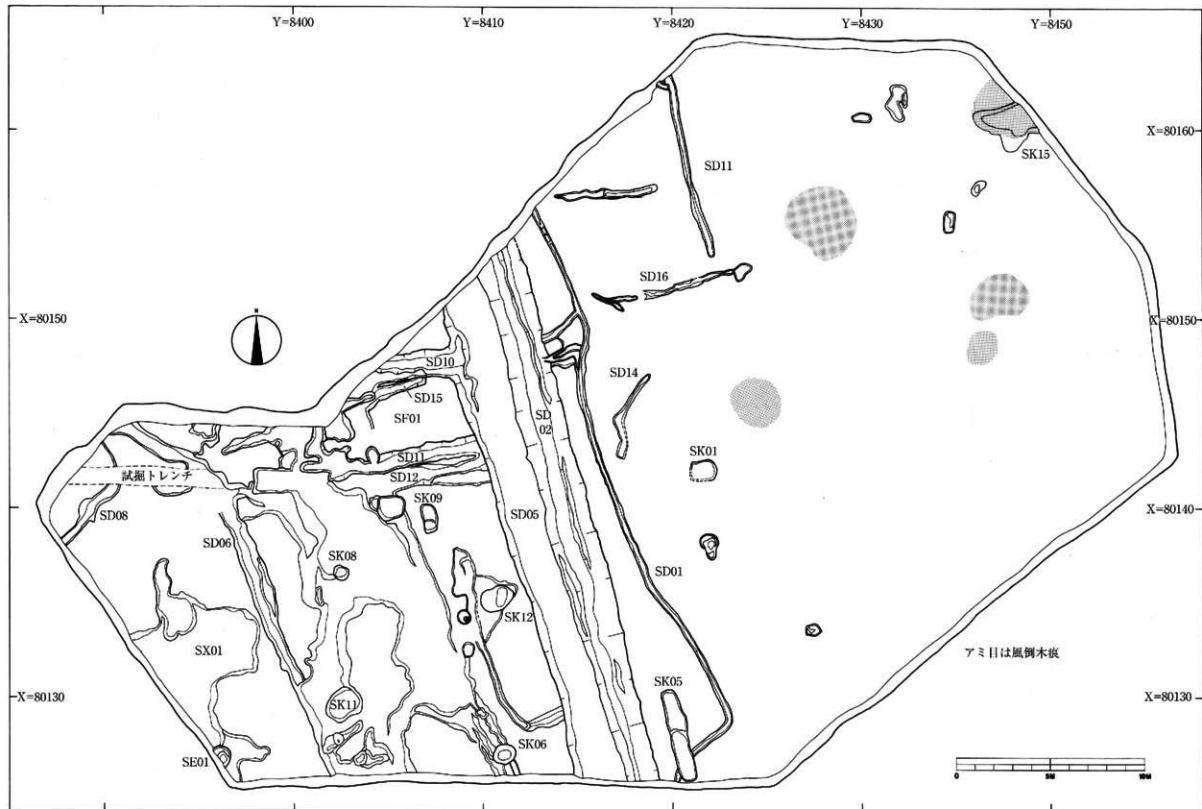
第15図 井戸跡(SE01)・土坑(SK06・SK09)(1:20)



第16図 道路跡(SF01) (遺構図1:20、杭断面図1:20)



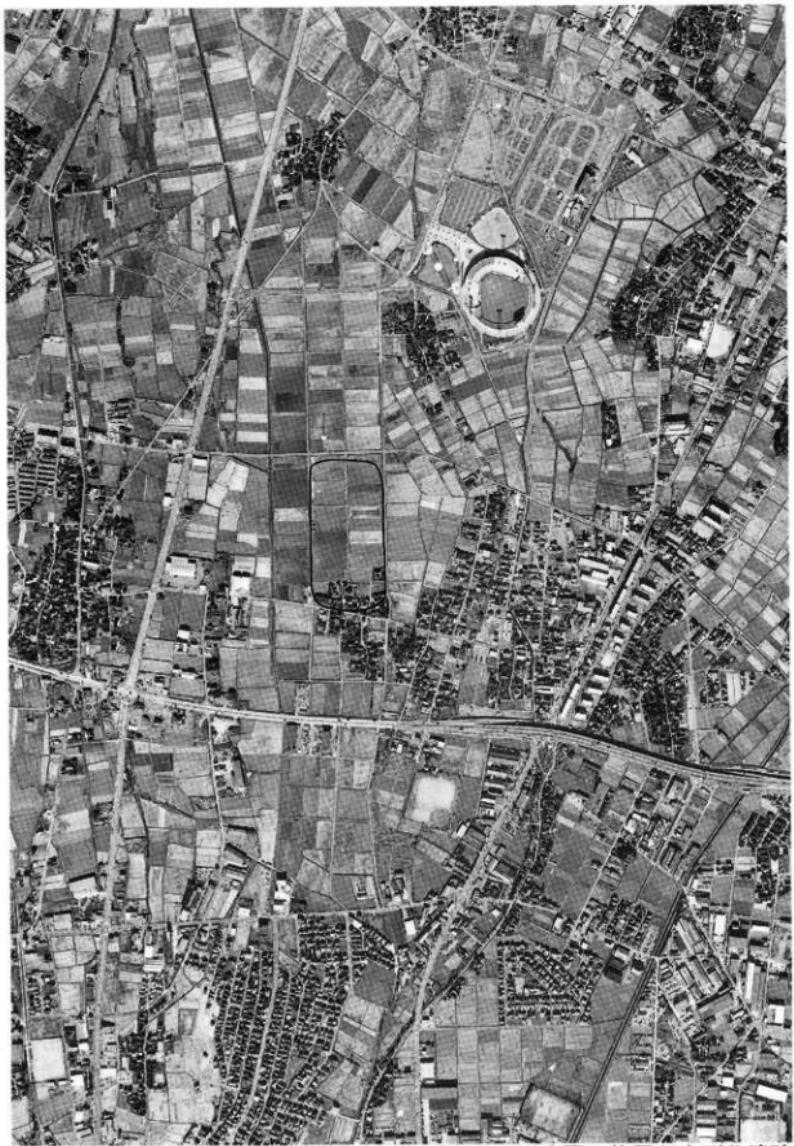
第17図 第1次調査地遺構配置図 (1:200)



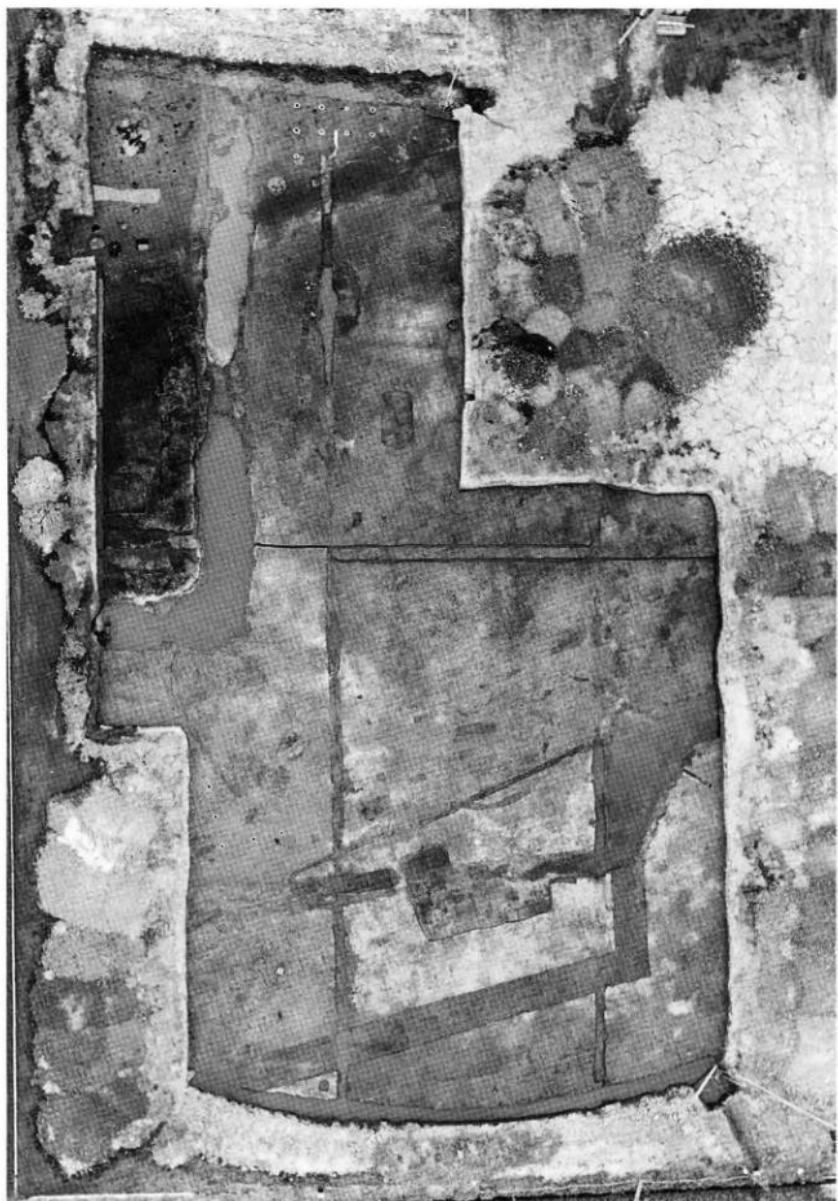
第18図 第2次調査地遺構配置図 (1:200)



遺跡周辺の空中写真 1953年4月米軍撮影(1:10,000)□の位置が小西北遺跡



遺跡周辺の空中写真 1993年11月米軍撮影(1:25,000)□の位置が小西北遺跡



調査区全景(真上より) 右が北



居館跡付近(北より)



居館跡(真上より) 下が北



居館跡全景(北西より)



居館内(南東より)



中世堀 SD01 遺物出土状況(東より)



中世堀 SD01 水が溜まっている状態(東より)



中世堀 SD01
遺物出土状況
(西より)



中世堀 SD01
遺物出土状況
(北西より)

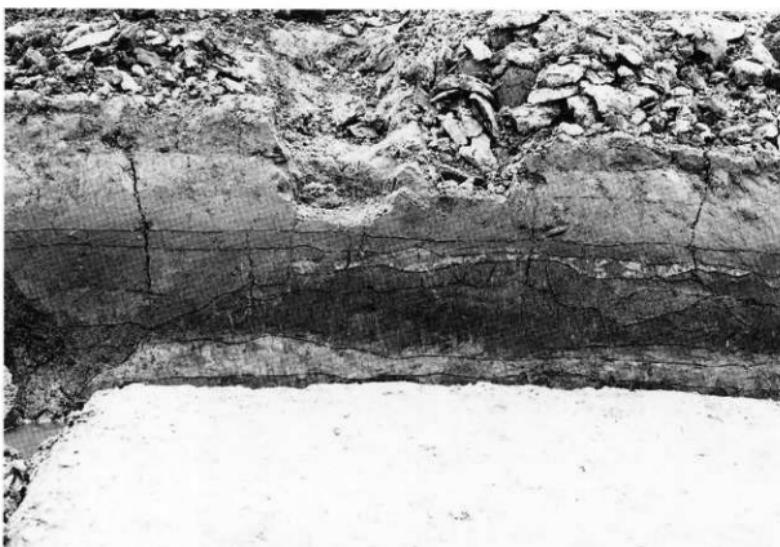


中世堀 SD01
小柄出土状況
(北より)



中世堀 SD01
遺物出土状況(東より)

中世堀 SD01
遺物出土状況(西より)



土壙痕跡確認状況(北より)



中世堀 SD01 土層堆積状況(北より)



中世堀 SD01 土層堆積状況(西より)



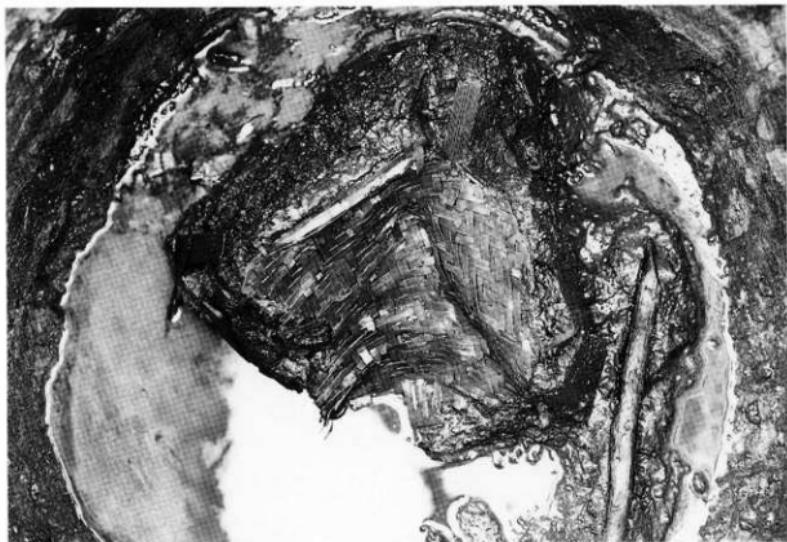
中世井戸 SE02 中世土師器・木製品出土状況(北より)



中世井戸 SE02 断割土層(南西より)



中世井戸 SE02 曲物出土状況(北西より)

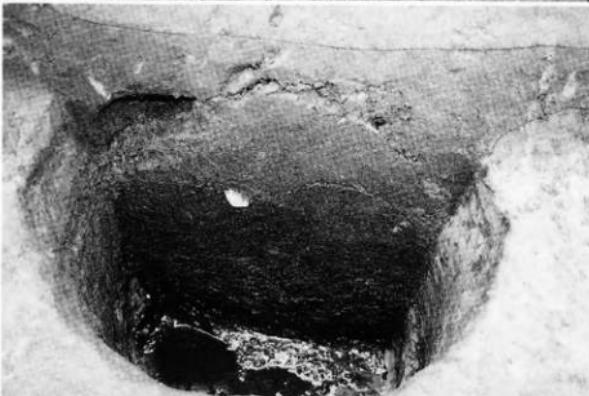


中世井戸 SE02 編物出土状況(北西より)

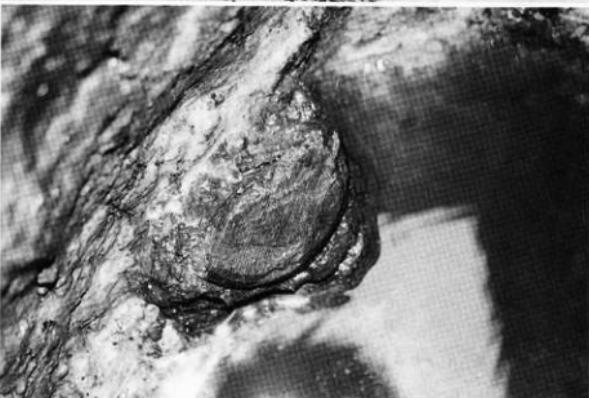
中世井戸 SE01
完掘状況
(南より)



中世井戸 SE01
土層堆積状況
(北より)



中世井戸 SE01
漆皿出土状況
(南西より)





中世土坑 SK01 遺物出土状況(南より)



中世土坑 SK01 遺物出土状況(西より)



中世土坑 SK05 木製品出土状況(北より)



中世土坑 SK05 木製品出土状況(北より)



中世土坑 SK17 遺物出土状況(南より)



中世土坑 SK17 遺物出土状況(南より)